
メランコリック・ラブソング

雲崎朝成

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

メランコリック・ラブソング

【Nコード】

N9170A

【作者名】

雲崎朝成

【あらすじ】

彼女との別れの場所へ向かう車内には、大好きなあの曲が流れていた。ちよつと不思議で切ない、夏の終わりの物語。

(前書き)

皆さんにも、夏の思い出の一曲があると思いますが、それを思い浮かべて読んでいただければ良いかな、なんていう短編です。

二人の思い出の道を、車でひた走った。海へと続いていく、切り立った崖の上にある狭い道はうねうねと曲がりくねっている。それでも、僕の運転する車は快調に目的地へと向かっていた。

車内には真夏の定番ソングが決まりきったように鳴り響いている。何回このアルバムを通して聞いただろうか。ちょうど一曲目が終わって、僕の一番お気に入りの曲が始まる。おそらくこの曲なら、歌詞なしで最後まで歌いきることができるだろう。カラオケにも収録されていない掛け声も含めて全部。

だけど今は、とてもじゃないけど歌う気分にはなれない、なぜなら、この今の時間が二人にとって最後だと分かっているから。この時間がかげがえのないものだと分かっているから。

僕達二人の間に全く会話はなく、曲は一方的に流れ続けている。場違いな、陽気なメロディが沈黙をより深く、重いものにしていく。二人の時間は止まってしまっても、目的地へは確実に近づいていた。ちょうど曲が一つ目のサビに入ろうとした瞬間、僕はようやく口を開いた。サビの部分をかき消すように妙に明るく、内心を悟られないように彼女に話しかけた。

「二年前に来たときは曇ってたけど、今日は晴れてて良かった。あんなときは最悪だったよなあ。帰るときなんか雨降り出しちゃってさあ。ちゃんと天気予報ぐらい確認しろっつうのね。まあ、今となっちゃあいい思い出だけだ」

彼女は俯いたままで、話を聞いていたのか、歌を聴いていたのか、判然としなかった。ともかく、残された時間をかみ締めるようにじつと目を閉じている。夕日に照らされた横顔は、火照ったように真

っ赤に染まっていた。

最初のサビが終わり、穏やかで優しげなメロディが僕達を包む。実は、僕が一番好きなのはこの間奏の部分なのだ。激しいサビの後、一転して緩やかなリズムが続く。一曲のうちのわずか一二十秒ほどの間奏にこそ、この曲を聴く価値があると僕は思っている。

「ねえ、私がいなくなったら、ジュンは悲しんでくれる？私が、どこか遠いところへ行ってしまっても、思い出してくれる？」

彼女は焦点の合わないまま、真っ直ぐに正面を見つめている。そんな彼女の横顔を見てしまったら、当たり前前の答えを言い出すのがどうしようもなく困難なことのように思われた。その横顔は、今まで見た彼女のどの表情よりも美しく、見とれてしまいそうになったのも事実である。でも、彼女がいつの間にか、一言も告げることなく、彼岸に渡ってしまったような気持ちの方が強かった。

いつの間にか間奏は終わり、再びAメロに入った。いつもならはつきりと思いつき出すことの出来る歌い出しが、今はまったく出てこなかった。

「僕は、忘れないと思う。いつまでもね。おじさんになって誰かと結婚しても、爺さんになって死ぬ間際になっても君を思い出すよ。きつと」

Bメロはサビへと繋がっていくために、テンポを速めていく。それに合わせて僕の心臓の鼓動も速くなっていく。

急に腕を掴まれて、危うくハンドルを思いっきり、きりそうになった。慌ててブレーキを踏む。スピードを出していなかったせいか、ガードレールの手前で車は止まってくれた。

隣を見やると、彼女は目に一杯涙を浮かべながら、僕に懇願するように見つめている。昔、こんなこともあったっけと思いつきながら

らも、彼女の目に浮かぶ一筋の狂気を読み取って、彼女はもう死んだんだと思った。車中には大サビが流れ始める。

「やっぱり、ジュンも死んでくれないかな？今ならまだ、間に合うと思うの。私も死んでから三日しか絶っていないし。きっと、今、死んでくれれば一緒にいられるはず。私は、ジュンが一人で幸せになるのが我慢できないの。ね、いいでしょ？苦しいのは一瞬よ。私だってそうだったもの。一瞬、苦しいのを通り過ぎれば、もう大丈夫だから」

クライマックスを終え、曲はエンディングに差し掛かっている。曲が終わりきるのを待つように、僕は真っ赤に染まった空を眺めていた。空は、いつまでも変わることがないんだろうか。そんなことをぼんやり考えた。

曲が終わると同時にアクセルを踏んだ。さっきよりも少し強く、足に力を入れる。夕日が沈んでしまう前に、彼女を海へ連れて行くうと思った。

砂浜を、二人、手を繋いで歩く。二人分の足跡が砂に刻まれていく。辺りに人影はなかった。日は地平線の向こうに沈みかけていて、闇が僕らを覆ってしまおうとしていた。地球が終わってしまうまで寄せては引いてを繰り返す波の、静かな心地いい音は、僕達をあの頃に戻してくれたようだった。

とうとう、波打ち際までやってきた。そこが、別れの場所だった。彼女は、僕の手を振りほどいて、少女のように海へと走って向か

つていく。僕は彼女を追いかけられることもせず、後姿をじつと見つめていた。

膝の辺りまで浸かってしまうほどの深さまで行くと、彼女はくると振り返った。

「ねえー、私といて幸せだった？楽しかった？いい思い出、たくさん出来た？」

笑顔を作ろうとするけれど、涙が溢れてきて、自分ではどうしようもなくなってきた。湧き上がる感情を抑えるように、大声で

「楽しかったようっ」

と答えた。色んなことを最後に言いたかったけど、それだけを言うので精一杯だった。

「じゃあ、良かった！」

そう言っただけで彼女は、笑顔で海の深くに歩みを進めた。波が彼女をさらってしまわないかと心配したけれど、そんなことはなく、どんだん影は小さくなっていった。もう頭のとっぺんしか見えなくなってしまうていた。

彼女が消えてしまうのを最後まで見届けられないまま、僕は来た道を引き返していった。砂浜には、一人分の足跡と、涙の跡が点々と残っていた。

重い足取りで車へと向かう僕の頭の中にはあの曲が、彼女との思い出と一緒に流れていた。

(後書き)

いかがでしたでしょうか？僕は、サゼンを思い浮かべながら書いて
ました。恥ずかしながら。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9170a/>

メランコリック・ラブソング

2010年10月10日05時55分発行